

明日（鲁迅作品日文版）PDF转换可能丢失图片或格式，建议阅读原文

https://www.100test.com/kao_ti2020/245/2021_2022__E6_98_8E_E6_97_A5_EF_BC_88_E9_c105_245725.htm 「声がしない。——

小さいのがどうかしたんだな」赤鼻の老拱（ろうきょう）は老酒（ラオチュ）の碗を手にとって、そういいながらをの方に向けて唇を尖らせた。皮阿五（らんひあご）は酒碗を下に置き、平手で老拱の脊骨をいやというほどドヤシつけ、何か意味ありげのことをがやがや喋舌（しゃべ）って「手前は、手前は、……また何か思い出してやがる……」片田の（ろちん）はまだなかなか昔で、どこでも大概七前にをめて寝るのだが、夜の夜中に睡（ねむ）らぬ家が二あった。一つは咸亨（かんこう）酒店で、四五人の友が台（スタンド）をんでみつづけ、一杯嫌の大はしゃぎ。も一つはその四嫂子（たんしそうし）で、彼女は前の年から後家になり、にも手（たよ）らず自分の手一つで糸をぎ出し、自活しながら三つになる子をとっている。だからくまで起きてるわけだ。この四五日糸をぐ音がぱったり途えたが、やはり夜更になっても睡らぬのはこの二だけだ。だから四嫂子の家に声がすれば、老拱等のみがきつけ、声がしなくとも老拱等のみがきつけるのだ。老拱は叩かれたのが上（むしょう）に嬉しいとえ、酒を一口がぶりとんで小を々と唱いはじめた。一方四嫂子は（ほうじ）を抱えて寝台の端に坐していた。地上には糸が静かに立っていた。暗く沈んだ灯火の下にのを照してみると、桃のような色の中に一点の青味をた。「おみ（くじ）を引いてみた。もしてみた。

もませてみた」と彼女は思いまわした。「それにまだ一向利き目がえないのは、どうしたもんだらう。あの何小仙（かしょうせん）のへ行ってせるより外はない。しかしこの病も昼はく夜は重いのかもしれない。あすになってお日が出たら、が引いて息づかいも少しはになるのだらう。これは病人としていつもありがちのことだ」四嫂子は感じのい女の一人だったから、この「しかし」という字の恐ろしさを知らない。いろんないことが、これがあるために好くなりることがある。いろんな好いことがこれがあるためにかえってくなりることがある。夏の夜（よ）は短い。老拱等が面白そうに歌を唱いると、まもなくが白み初（そ）め、そうしてまたしばらくたつと白かね色の曙の光がの際から射しんだ。四嫂子が夜明けを待つのはこの他人のようなものではなかった。何てまだるっこいことだらう。の一息はほとんど一年もつようなさで、在あたりがハッキリして、天の明るさは灯火を倒し、の小鼻をると、いたり窄（すぼ）んだりして只事でないことがよく解る。「おや、どうしたら好かろう。何小仙のでてもらおう。それより外に道がない」彼女は感じのい女ではあるが心の中に断があった。そこで身を起して箱（ぜにばこ）の中から日してめんだ十三枚の小と百八十のをさらけ出し、皆ひっくるめて衣套（かくし）の中に押し、をしてを抱えて何家（かけ）の方へと一散に走った。早朝ではあるが何家にはもう四人の病人が来ていた。彼女は四十仙で番号札をい五番目のになった。何小仙は指先でのをったが、爪先（つまさき）がさ四寸にも余っていたので、彼女は内心畏敬しては助かるに

いないと思った。しかしなかなか落ちついていられないのでせわしなくき始めた。「先生、うちのは何の病いでしょう」「この子は身体の内部が焦げて塞がっている」「いますまいか」「まず二服ほどめばなおる」「この子は息苦しそうで小鼻がいています」「それや火が金（かね）に（こく）したんだ」何小仙は皆まで言わずに目をじたので、四嫂子はその上きくのも羞（はずか）しくなった。その何小仙の向うに坐していた三十余りの男が一枚の方をきり、の上の字を一々指して明した。「この最初にいてある保活命丸（ほえいかつめいがん）は家世老店（こかさいせいろうてん）より外にはありません」四嫂子は方を受取ってきながら考えた。彼女は感じのいい女ではあるが、何家と世老店と自分の家は、ちょうど三角点に当たっているのを知っていたので、をってから家（うち）へるのが序だと思った。そこですぐに世老店の方へ向ってき出した。老店の番もまた爪先をく伸ばしている人で、悠々と方を眺め悠々とを包んだ。四嫂子はを抱いて待っていると、はたちまち小さな手を伸ばして、彼女のの毛を攫（つか）み中になって引った。これは今までたことのないだから、四嫂子はそら恐ろしく感じた。日はまんまると屋根の上に出ていた。四嫂子は包（くすりづつみ）と子供を抱えてき出した。はえず藻いているので、路は果てしもなく、行けば行くほど重味を感じ、しようことなしに、とある前の石段の上に腰を卸すと、身内からにじみ出た汗のために著物（きもの）が冷（ひや）りと肌に触った。一休みしてが睡りについたのでをてき出すと、また支え切れなくなった。するとたちまち耳

元で人声（ひとごえ）がした。「四嫂子（あねえ）、子供を抱いてやろうか」皮阿五の声によく似ていた。ふりかえってみると、果して皮が寝不足の眼を擦りながら後ろから跟（つ）いて来た。こういうに天将の一人が降して一臂（び）の力を添える事が、彼女の希望であったのだろうが、今みもしないで出て来たのがこの阿五将だ。しかし阿五には一片の侠があって、どうあっても世しないではいられないのだ。だからしばらく押答の末、遂にされて、阿五は彼女の乳房と子供のに臂（ひじ）を入（さしい）れ、子供を抱き取った。一刹那、乳房の上が温（あたた）く感じて彼女のが真赤にほてった。二人は二尺五寸ほどれてき出した。阿五は何かしかけたが四嫂子は大半答えなかった。しばらくいたあとで阿五は子供を返し、昨日友と束した会食の刻が来たことを告げた。四嫂子が子供を受取ると、そこは我家の真近で、向うの家の王九（おうきゅうま）が道端の台に腰けてくの方からしかけた。「四嫂子（あねえ）、はどんな工合だえ、先生にてもらったかえ」「てもらいましたがね、王九、女は年をとってるから眼が肥えてる。いっそ女のお眼（めがね）でていただきましょう。どうでしょうね、この子は」「ウン……」「どうでしょうね、この子は」「ウン……」王九はいずまいをなおしてじっと眺め、首を二つばかり前に振って、また二つばかり横に振った。家（うち）へってようやくをませると、十二もすでにぎていた。四嫂子はをつけて子をた。いくらかになつたらしいが、午後になってたちまち眼をき「（マ）……」と一声言ったまま元のように眼をじた。睡ってしまったのだろう。

しばらく睡ると、や鼻先から玉のような汗が一粒々々にじみ出たので、彼女はこわごわさわってみると、（にかわ）のような水が指先に粘りつき、あわてて小さな胸元でなでおろしたが何のものない。彼女はこらえ切れず泣き出した。

100Test 下载频道开通，各类考试题目直接下载。详细请访问
www.100test.com